18　次の文章は『浜松中納言物語』の一節である。中納言は亡き父が中国のの第三皇子に転生したことを知り、契りを結んだ大将殿の姫君を残して、朝廷に三年間のを請い、中国に渡った。そして、中納言はみで籠もる女性と結ばれたが、その女性は御門のであり、第三皇子の母であった。后は中納言との間の子（若君）を産んだ。三年後、中納言は日本に戻ることになる。以下は、人々が集まる別れの宴で、中納言が后に和歌を詠み贈る場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。　　〈東京大〉二〇二二年度出題

　忍びがたき心のうちをうちでぬべきにも、アさすがにあらず、わりなくかなしきに、もすこし立ち出でさせ給ふに、御前なる人々も、おのおのものうち言ふにやと聞こゆるまぎれに、

　　ふたたびと思ひ合はするかたもなしいかに見し夜の夢にかあるらむ

いみじう忍びてまぎらはかし給へり。

　　夢とだに何か思ひも出でつらむイただまぼろしに見るは見るかは

忍びやるべうもあらぬ御けしきの苦しさに、言ふともなく、ほのかにまぎらはして、すべり入り給ひぬ。おぼろけに人目思はずは、ひきもとどめたてまつるべけれど、ウかしこう思ひつつむ。

　より皇子出でさせ給ひて、御遊びはじまる。何のものの音もおぼえぬ心地すれど、をかぎりと思へば、心強く思ひ念じて、賜はり給ふも、うつつの心地はせず。のうちに、のことかき合はせられたるは、にて聞きしなるべし。やがてその世の御おくりものに添へさせ給ふ。「今は」といふかひなく思ひ立ち果てぬるを、いとなつかしうのたまはせつる御けはひ、ありさま、耳につき心にしみて、肝消えまどひ、さらにものおぼえ給はず。「日本に母上をはじめ、大将殿の君に、れしほどなく引き別れにしあはれなど、エたぐひあらじと人やりならずおぼえしかど、ながらへば、三年がうちに行き帰りなむと思ふ思ひになぐさめしにも、胸のひまはありき。これは、またかへり見るべき世かは」と思ひとぢむるに、オよろづ目とまり、あはれなるをさることにて、后の、今ひとたびの行き逢ひをば、かけ離れながら、おほかたにいとなつかしうもてなしおぼしたるも、さまことなる心づくしいとどまさりつつ、わが身人の御身、さまざまに乱れがはしきこと出で来ぬべき世のつつましさを、おぼしつつめることわりも、ひたぶるに恨みたてまつらむかたなければ、いかさまにせば、と思ひ乱るる心のうちは、言ひやるかたもなかりけり。「いとせめてはかけ離れ、なさけなく、つらくもてなし給はばいかがはせむ。若君のかたざまにつけても、カわれをばひたぶるにおぼし放たぬなんめり」と、推し量らるる心ときめきても、消え入りぬべく思ひ沈みて、暮れゆく秋の別れ、キなほいとせちにやるかたなきほどなり。御門、東宮をはじめたてまつりて、惜しみかなしませ給ふさま、わが世を離れしにも、やや立ちまさりたり。

〔注〕　○琴のこと――弦が七本の。

　　　　○未央宮にて聞きしなるべし――中納言は、以前、未央宮で女房に身をやつした后の琴のことの演奏を聞いた。

　　　　○その世――ここでは中国を指す。

　　　　○東宮――御門の第一皇子。

　　　　○わが世――ここでは日本を指す。

問１　傍線部ア・ウ・キを現代語訳せよ。

◎問２　「ただまぼろしに見るは見るかは」（傍線部イ）の大意を示せ。

問３　「たぐひあらじと人やりならずおぼえしかど」（傍線部エ）とあるが、何についてどのように思ったのか、説明せよ。

問４　「よろづ目とまり、あはれなるをさることにて」（傍線部オ）とあるが、それはなぜか、説明せよ。

問５　「われをばひたぶるにおぼし放たぬなんめり」（傍線部カ）とあるが、なぜそう思うのか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ア＝ＡそうはいうもののやはりＢ口に出せず、Ｃどうしようもなく悲しいが

Ａ＝３〔「そうはいうものの」の意味が明示できていなければ０。〕

Ｂ＝４〔「あらず」の具体的な説明がない場合は０。〕

Ｃ＝３〔「悲しいが」は「悲しいときに」も可。〕

　　　ウ＝Ａ賢明にもＢ自制し差し控える

Ａ＝４〔「分別をもって」なども可。〕

Ｂ＝６〔「自制する」だけでも可。また「思いとどまる」も可。〕

　　　キ＝Ａやはりとても切実でＢ心の晴らしようのない時節である

Ａ＝５〔「切実で」は「痛切に」でも可。〕

Ｂ＝５〔「時節」は「時」「頃」などでも可。〕

問２　Ａ現実とは思えない夢のようなでは、Ｂ逢瀬とはいえない。

Ｂの内容が間違っていれば全体０。

Ａ＝４〔「現実とは思えない」「夢のような」のどちらかだけでも可。〕

Ｂ＝６〔反語表現によって主張している内容を記していなければ０。〕

問３　Ａ自ら決断した母や妻との別れについて、Ｂ比類ない悲しみだと思った。

Ａ＝７〔自己の決断・選択という内容がなければ、減点４。〕

Ｂ＝３〔「比類ない」は「この上ない」「並々でない」も可。〕

問４　Ａ再び中国に戻り后に会うことは決してないと思うとＢ名残惜しいから。

Ａ＝８〔「決してない」「二度とない」という内容が不十分ならば０。〕

Ｂ＝２〔「名残惜しい」は「つらい」でも可。〕

問５　Ａ后と中納言の子である若君が、Ｂ二人をつなぐ存在になると思うから。

Ａ＝７〔若君が后と中納言との間の子である説明がなければ０。〕

Ｂ＝３〔若君の存在の意味の説明が不明確ならば０。〕

【現代語訳】

（中納言は）隠しきれない心の中（の后への情愛）を口に出してしまいそうになるにつけても、問１アそうはいうもののやはり口に出せず、どうしようもなく悲しいが、皇子も少し出て行きなさるので、（后の）御前にいる人々（＝女房たち）も、めいめいちょっと口に出しているのかと聞こえてくる（その話し声に）紛れることで、

　（あなたとの夢のような逢瀬が夢でなく現実のものであったと、私には）二度と思い合わせる手立てがありません。あのときの逢瀬は一体どのように見た夜の夢なのでしょうか。

（と詠んだ歌を）たいそう人目を避けてごまかし（后にお贈り）なさった。

　夢とさえもどうしてあなたは思い出しているのでしょうか。ひたすら幻のようにはかない逢瀬では逢ったことになるのでしょうか、いえ逢ったとはいえないでしょう。

こらえきれそうにもない（中納言の）ご様子（を見るそ）の苦しさで、（后はこの歌を）言うともなく（口にして、それを）、かすかにごまかして、そっと（御簾の）中にお入りなさった。もし普通に人目を気にしなければ、（中納言は后を）引きとどめ申し上げるに違いないけれども、問１ウ賢明にも自制し差し控える。

　内裏から皇子がお出ましなさって、管弦のお遊びが始まる。（中納言は）どんな楽器の音も（何とも）思われない気持ちがするけれども、（この地で過ごすのは）今宵を最後と思うと、気丈に思い我慢して、（皇子から）琵琶をいただきなさるのも、現実のような気持ちはしない。（后が）御簾の中で、のを弾き合わせなさっているのは、未央宮で聞いた曲であるに違いない。（后は弾いていた琴の琴を）そのままこの中国の御贈り物としてお加えなさる。（中納言は）「今は（もうこれまでです）」とどうしようもなく決心し終えたところ、たいそう親しみ深くおっしゃった（后の）ご気配、様子が、耳に残り心にしみて、気力も萎え心乱れ、まったく何もおわかりにならない。「日本で母上をはじめ、大将殿の姫君に、慣れ親しんだと思う間もなく別れてしまった悲しみなど、ほかに比べようもないだろうと自分で決めたことである（ものの、そう）と思われたけれども、生きながらえるならば、三年以内に（日本へ）きっと帰って来るだろうと思う気持ちで（悲しみを）慰めたことでも、心の余裕はあった。（しかし）この度は、（日本に帰国し）再び（ここに）戻って（后に）逢うことができる国だろうか（、いや簡単に戻れる国ではない）」と断念すると、あらゆることに目がとまり、しみじみと感慨深く思うのは当然のことであって、（しかも）后が、（中納言との）もう一度の出逢いを、かけ離れ（た立場であり）ながら、大体のところとても親しみ深くふるまいお考えなさっていることも、（中納言にとっては）異様な物思いがますます募り募りして、自分の身や后の御身（にとって）、さまざまに混乱したことがきっと出て来るような世のきまり悪さを、（后が）りなさ（り、自分との再会を控えてい）る道理も（もっともであり）、ひたすらに恨み申し上げる筋合いもないので、どのようにすれば（いいのだろうか）、と思い乱れる心の中は、言葉にする手立てもなかった。「（后が）とても無理に距離を置き、情愛もなく、薄情にふるまいなさったならばどうすればよいだろうか（、いやどうしようもない）。（しかし）若君の筋につけても、私をまったくきっぱりとお見放しなさることはないようだ」と、自然と推し量る心は（期待で）ときめいても、（別離を思うとすぐにまた）正気を失ってしまいそうに思い沈んで、暮れ行く秋の別れは、問１キやはりとても切実で心の晴らしようのない時節である。帝や、東宮をはじめとし申し上げて、名残を惜しみなさる様子は、わが国（＝日本）を離れたときよりも、いくらかまさっている。